平成 27 年度　新潟県大学生の力を活かした集落活性化事業実績報告書

粟島しおかぜ地域共生プログラムの構築研究

島資源を活かした学習・ツーリズム・産品開発と首都圏連携による雇用・定住促進策の検討

2016 年 3 月

大正大学 NCP フィールドワーク「地域づくり教育論」研究グループ

参加学生　阿部雄太　阿部ゆり　内田歩実　角田祐基　髙橋咲紀　佐原多恵　花岡史悠
土方優紀　眞野聡美　幅野裕敬

担当教員　出川真也（大正大学地域構想研究所）

目次

事業概要・・1

１．調査研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

２．調査研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

３．調査研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

４．調査研究の方法と内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
（１） 現地調査と住民との検討ワークショップの実施・・・・・・・・・・・・・4
（２） 試行プログラムの作成と検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
（３） 試行プログラムの実践と修正・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
（４） 首都圏におけるプレゼンテーション・プロモーション活動・・・・・・22
（５） モデルプログラム作成と実施体制づくりの検討・・・・・・・・・・・・24

５．研究調査成果と次年度以降の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
（１） 本研究調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
（２） 課題と次年度以降の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

６．総括・・29

（参考資料）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
① 事業実施広報･チラシ等の作成物
② 資源カードデータ
③ 指導者手引書案
④ 島外者が参加協働可能な年中行事の検討案
⑤ お手伝いプログラムパンフレット類

粟島しおかぜ地域共生プログラムの構築研究

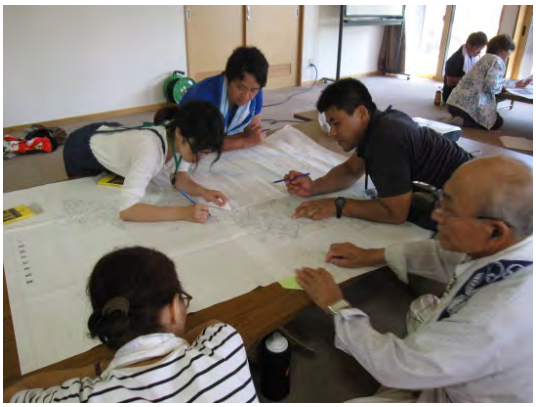
ー島資源を活かした学習・ツーリズム・産品開発と首都圏連携による雇用・定住促進策の検討ー

事業概要

粟島浦村の自然･文化･人材資源を活用し、島外者が島内住民とともに取組むことができる島づくりプログラムの作成を行った。プログラム作成のために島民と共に、①地域調査と調査に基づいた試行プログラムの作成、②プログラムの試行、③首都圏でのプレゼン・プロモーション活動、④事業化に向けた体制整備検討を行った。

以上の結果、島内外の参加者が協働できるものとして、主に島の高齢者が担ってきた里山・農業、手仕事（民具づくり）、郷土料理、共同作業・年中行事に光を当て、これらを構成要素とした学習観光プログラムを構想し取りまとめた。

次年度は本年度作成したプログラムをシーズンごとに試行実践し、事業化に向けた検討を行うことを予定している。



ヒアリング情報を地図に書き込み検討

伝統民具づくり調査の様子

１　調査研究の背景－粟島浦村の概要と課題－

粟島浦村は人口 350 人余り、日本海に浮かぶ周囲 20km ほどの離島の村である。本土側からは新潟県最北端の市である村上市より汽船で１時間半ほどの位置にあり、澄んだ海と豊富な海産資源、かつては野生馬を育んだ里山の恵みが魅力である。西海岸は日本海の荒波に洗われた岩礁地帯となっており、まさに絶景と呼ぶにふさわしい風光明媚な景観が広がっている。

近年、過疎・少子高齢化が進んでおり島の人口も最盛期の半分以下となっている。人手の不足から島環境の劣化や里海における生業の低迷などが危惧されている。

村では島外の子ども達を島の学校に受け入れる「しおかぜ留学」や島への移住促進につなげる観光事業など、島外の人々との連携協働による人づくりと島の活性化を模索し始めている。そのため島民と島外者が協力して、島作りのために共に取組めるもの（こと）の掘り起こしが求められている。

写真１：豊かな海と里山に囲まれた粟島の集落

２　調査研究の目的

粟島浦村の自然･文化･人材資源を活用し、島民とともに島外者が取組むことができる島づくりプログラムを作成することを目的とする。

島民の潜在能力再発見	・地元学（地域調査） ・地域内コミュニケーション活性化 ・島の多様な人材掘り起し
日常生活に依拠したプログラム開発	・暮らし資源の再認識・活用策の検討 ・島民の営み自体が地域資源として活用できるプログラムの検討
「地域人」育成	・地域志向の島民･島外人材育成 ・島民が元気に暮らす魅力を創り出すことを基盤に、I・Uターン者への訴求力を向上
首都圏連携による活性化	・「地方・都市共生」視点の導入 ・「すがもアンテナショップ」構想の検討 ・豊島区からの教育ツアーなどの展開を模索

図１：本調査研究の意図と構成要素

プログラム作成のための調査、プログラムの試行、事業化に向けた体制整備検討活動を通じて、既存団体を含む活動体の組織強化を図る。あわせて首都圏連携を見据えた活動展

開策を検討し、首都圏との連携を視野に入れた島内外の人材がかかわることができる新たな生業創出と、定住促進に向けたロードマップとヴィジョンを明確にしていく。

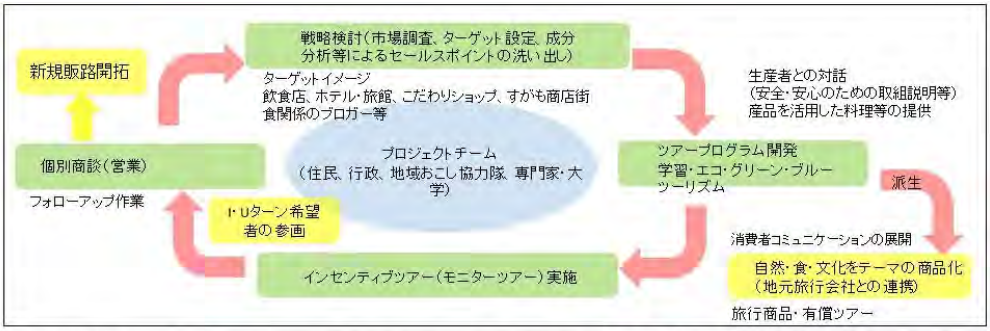


図２：本調査研究を契機とした島づくりの波及展開イメージ

３．調査研究の概要

研究目的を達成するため、新潟県粟島浦村内浦集落及び釜谷集落をフィールドにして以下の調査研究を行うとともに、首都圏でのプレゼンテーションやプロモーションに資するPR 活動を実施し、島づくりのモデルプログラムを取りまとめた。

（１）現地調査と住民とのワークショップの実施（実施期間：７月３日～８日、８月２日～８日、９月６～８日）

粟島浦村内浦・釜谷集落において住民と共に現地調査を行うとともに、調査結果を共有し活用するための検討ワークショップを実施した。

（２）試行プログラムの作成と検討（実施期間：８月～10 月）

調査結果を踏まえた島づくりに資する試行実践プログラムを作成し、関係住民と共に試行実践に向けた検討を行った。

（３）試行プログラムの実践と修正（実施期間：11 月 13 日～15 日）

試行プログラムを実践し、その有効性や課題について検証した。

（４）首都圏におけるプレゼンテーション・プロモーション活動（実施期間 10 月～11 月）

豊島区公共施設、大正大学イベント、離島物産展等において、本調査・研究成果をプレゼンテーションするとともに、作成したモデルプログラムのプロモーションにつながる PR 活動を行った。

（５）モデルプログラム作成と実施体制づくりの検討（実施期間 12 月～３月）

試行実践やプレゼンテーション結果を踏まえてプログラムを修正し、モデルプログラムとして取りまとめるとともに、その実施体制について検討を行った。

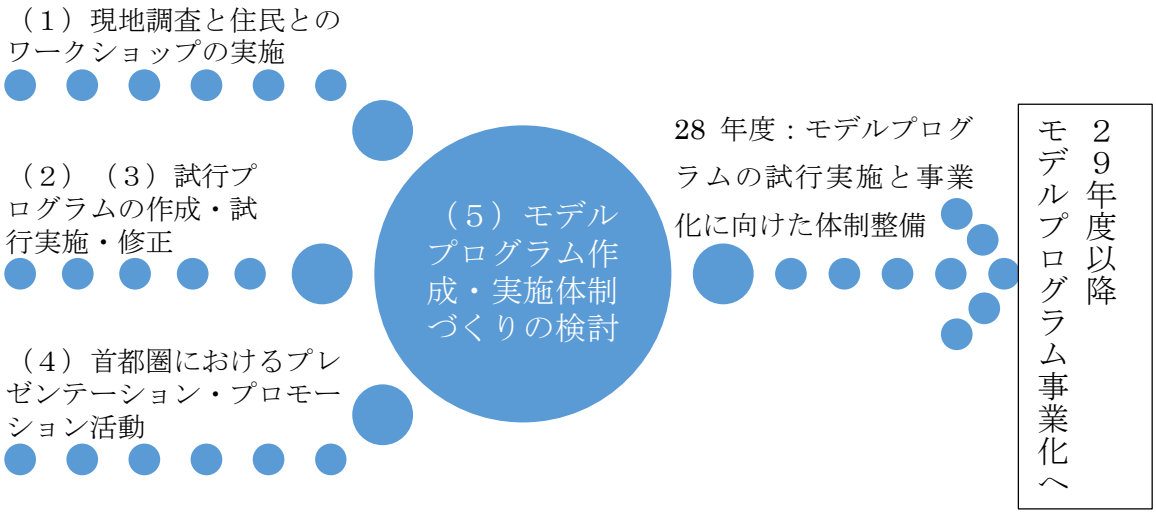


図３：研究調査のプロセス

４．調査研究の方法と内容

（1）現地調査と住民との検討ワークショップの実施

粟島浦村内浦・釜谷集落において住民と共に現地調査を行うとともに、調査結果を共有し活用するための検討ワークショップを実施した。

1）予備調査（7 月３日～８日）

調査を行うにあたって、担当教員（１名）が事前に粟島浦村を訪問し、想定される調査フィールドの状況を確認するとともに、関連資料･文献を収集し、関係団体や協力者との調整を行った。また粟島浦の対岸にあたる村上市の NPO 等組織との連携可能性についても合わせて調査を行った。

予備調査の結果、本調査では内浦地区及び釜谷地区のそれぞれにおいて、①里山（山菜類・竹林・薪取等）、②農業（家庭菜園や馬牧場なども含む）、③海・漁業　④食（郷土料理）や生活文化（暮らし・道具・神仏・歴史等）等について、住民と共に活用資源としての可能性を模索するための調査と検討ワークショップをおこなうこととした。

また、本調査におけるワークショップ活動への島民協力者を募るため、広報チラシ（巻末参考資料①）を作成し、村役場の協力を得て広報を行った。なおチラシの作成に当たっては、役場担当者の助言をいただきながら、文字の大きさ（高齢者が読めるような）、わかりやすい表現、イメージ写真の添付など、島の暮らしや実情を踏まえた伝わりやすいものとなるよう配慮した。

2）本調査－現地調査及び検討ワークショップの実施－

①本調査活動の概要

８月２日（東京発）～８日（東京着）日程で、学生７名、教員１名の計８名が粟島浦村を訪問し、島民（約 30 名が協力）と共に現地調査及びワークショップを行った。

日程は次の通り。

日時	場所	内容
8 月 2 日(日)	池袋発	23：30 発夜行バス
8 月 3 日(月)		
12：15	粟島港着	大正大メンバー　学生７名＋教員１名、計８名
13：30	役場訪問	ご挨拶・自己紹介・全体概要説明・荷物受け取り その他関係機関あいさつ回り
	マリンストア	買出し
15：10	移動	シーバード（15：10 内浦発→15：35 釜谷着）
16：00	さっこい交流館	準備作業
19：00	さっこい交流館	調査参加メンバー事前打合せ （住民メンバー１名程度×６分野＋区長＋役場）
8 月 4 日(火)		
9：00	さっこい交流館	■釜谷地区住民　概要・日程説明（9：15 調査開始）
9：15	移動	内浦グループ移動（役場車両）
9：30	老人憩いの家	■内浦地区住民　概要・日程説明（9：45 調査開始） ※調査グループについて 各地区と以下の通り ・学生＋住民（内浦・釜谷）分野別全員＋子ども達 ＋役場関係 ・里山・農・海・食と生活文化分野の３グループ編成 編成：(学生＋住民 3～4 名＋子ども達）×３グループ
12：00		お昼　各方面別に現場で昼食
14：00	移動	内浦グループさっこい交流館へ移動（役場車両）
14：30	さっこい交流館	■収集資料の取りまとめ ・調査の取りまとめ作業 ・写真の印刷、マップ作り・資源カード ・必要に応じて追加調査・取材
16：45		・発表会（情報共有）
17：30	終了解散	
8 月 5 日(水)		
9：35	移動	シーバード（9：35 釜谷港発→10：10 内浦着）
10：30	役場	■調査結果共有

		住民メンバー各分野２名程度＋区長＋役場 ・調査結果の報告 （若手グループとの情報交換結果等も踏まえて） ・活用方法の検討 ・次回試行実践プログラムの検討
12：00	マリンストア	買出し
12：30	移動	コミュニティバス（12：30 役場発→12：45 釜谷港着）
PM	さっこい交流館	■検討結果の整理と調査資料の取りまとめ ・必要に応じて追加調査・取材
夜	役場	■情報交換会
8 月 6 日(木)		
AM	現場の海 （内浦）	■定置網グループ海活動取材
PM	島内各所	■自由時間・温泉・七夕の準備手伝いなど
夕方		■七夕参加（17：30～20：00）
20：00	移動	役場車両（セドリック借り出し２往復輸送）
8 月 7 日(金)		
9：00	さっこい交流館	・掃除・撤収作業など 出川荷物発送と 役場車両返却 その後、9：30 コミュニティバス（北周りルート要予約）で釜谷へ戻り
11：15	移動	シーバード（11：15 釜谷港発→11：50 内浦着）
13：00	役場	・活動報告と次回活動の打合せ
15：15	粟島港発	
8 月 8 日(土)		
5：00	池袋着	

②住民との協働による現地調査･ヒアリング活動－

・住民との協働による現地踏査と情報収集

内浦地区、釜谷地区において、住民とともに島内を一緒に歩き、地域の自然･文化について情報を収集した。

各集落とも、里山、集落、海の３グループを編成。里山グループは主に里山及び隣接する農地の自然特性やそこでおこなわれている生業について調べた。集落グループは主に集落内の家屋敷、民具、食文化、年中行事、神社仏閣･自然神など生活文化全般を対象にした

調査を行った。海グループは海に関する生活上の事柄（遊び等も含む）や漁産業にかかわることを対象に調査した。

各グループは住民と学生混合で５～６名ほどで構成され、現地案内者、ヒアリング記録者、写真撮影者、地図記載者等役割を分担して、地域情報を収集した。

・調査結果を踏まえたワークショップ

収集した情報を、地域資源カード（巻末参考資料②）と地域情報マップに取りまとめ、情報共有するとともに、意見交換するワークショップを開催した。住民と共に現地確認と取りまとめ作業をおこなったということもあり具体的な次元で議論することができたといえる。

ワークショップでは外部者の目から見た島内の自然･文化特性についての驚きや感動、住民による身近な生活･暮らし･環境への新たな気づきなどがあった。また里山や農地、食文化等に関する潜在的可能性や､その管理･活用に関する課題などについても活発な意見交換を行った。

③定置網漁の見学･取材

漁船に乗船し、島の主産業の一つである定置網（大謀網漁）漁の様子を取材・見学した。

出港準備－出港－漁－帰港の一連の流れをビデオ及び写真撮影するとともに、その模様を時系列順に記録し島外者と協働で取り組める要素がないか調査を行った。

その結果、漁に関しては、高度な専門性を求められる要素が多く協働可能な取り組みが構想しにくいと考えられた。このためまず漁以外の分野で協働プログラムを作成し、それとセットで漁見学など間接的な形でプログラム設定を行う方向で検討を行うこととなった。

写真２：島の農地の作物について案内していただく

写真３：現地踏査で分かったことを地図に記載し確認

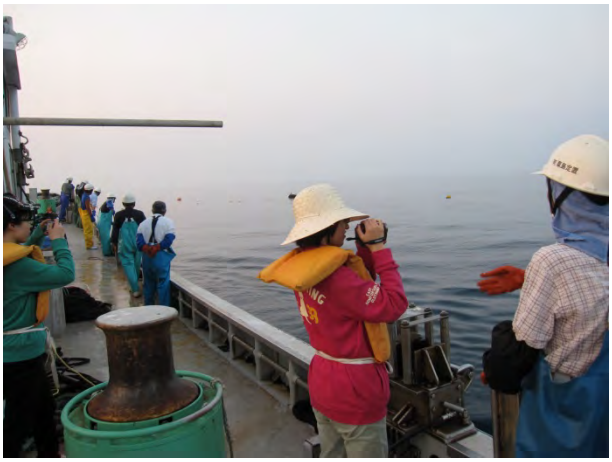


写真４：漁船に乗って定置網(大謀網)漁を見学

④その他島内自然・文化の把握と既存資料の収集活動

島内を周遊する観光船シーバードを活用し、会場から島の自然地形等について観察するとともに写真撮影を行い、プログラム冊子等に利活用できる情報収集を行った。

また調査期間中に行われた七夕祭りに参加し、内浦地区・釜谷地区の両地区の取材を行った。合わせて活用可能な年中行事について確認を行った。

写真５：七夕行事に参加（独特の舟型の笹飾り）

さらに情報収集のため内浦地区にある郷土資料館を訪問し文化・暮らしにかかわる資料収集を行った。現地で収集した主な資料として次の文献を挙げる。

「あわしま風土記」粟島浦村教育委員会 1991

「新編粟島今昔物語」粟島浦村役場教育委員会（発行年不詳）

「粟島の板碑文化」粟島浦村 1986

「越後粟島の方言」安藤清著　粟島浦村教育委員会発行 1997

「越後粟島わらべ唄」安藤清著　粟島浦村教育委員会発行 1991

「神秘郷・粟島　今は昔－明治後半期と昭和初期の島の姿－」安藤清編　粟島浦村教育委員会 1994

⑤本調査の結果と追加調査計画の立案

本調査の結果、島民と島外者が協働できる島づくり分野として、専門性の求められる漁業分野ではなく、里山、農業、工芸品作りや郷土料理などの生活文化、共同作業・年中行事が考えられることが明らかになってきた。島の里山･農地環境の健全さが島の豊富な沢水を通じて、周辺海域の環境にも良好な影響を与えているといった相関関係についても考えられる。このことは島陸地部の健全な営みは環境保全及び主産業である観光や漁業を守る上でも重要であるともいえる。

写真６：調査結果を住民と共有し、意見交換

里山・農業分野の主要な担い手は現在、高齢者となっており、人手不足の懸念が出ていることから、協働へのニーズも比較的高いと考えられる。そこでこれら分野について高齢者や自治会長へのヒアリングや現地確認をおこなう行うため、次の追加調査項目を立案した。

・追加調査項目案
a.9 月 6～7 日は、島外者が関われる島のお手伝いスケジュールを調査
b.畑仕事･山菜取りに精通する島のおばあちゃんにヒアリング
c.工芸品作りに精通する島のおばあちゃんにヒアリング
d.里山･農業に関わるスケジュールを確認
e.年 70 回の行事のうち、集落行事で、外部者が参加･協働できる行事を精査（必要に応じて再生したい行事もピックアップ）
f.集落内のお手伝い･共同作業で、外部者が体感し取組めるものを精査
・ヒアリング調査対象とする主な島内人材
a.山菜取り、畑仕事、手仕事(工芸品)に精通するおばさん・おばあちゃん
b.島の行事カレンダーと内容に精通するおじさん・おじいちゃん
３）追加調査の実施－
①追加調査の概要
９月６日～８日にかけて、学生２名、教員１名が訪島し、里山、農業、生活文化（民具･郷土料理等)、年中行事について追加調査を行った。ヒアリング対象として、里山や農業にかかわる生業に詳しい高齢者、生活文化に詳しい地元女性、年中行事や共同作業に詳しい自治会長に協力をいただいた。調査方法は、役場･公民館等でのヒアリングを行い、その後現地を確認し取材するという方法をおこなった。
また調査期間中、地方版総合戦略に関する報告会に参加し、調査の現状を報告すると共に、住民との意見交換をおこなった。実施日程は以下の通りである。

日時	場所	内容
9 月 6 日（日）		
13:25	粟島港着・役場	挨拶と追加調査概要の説明
14:30		ヒアリング調査１（島のお手伝い調査）
19:00		地方創生グループとの会合
9 月 7 日（月）		
9:00	農地・里山及び	ヒアリング調査２（島の里山・郷土料理・工芸品調査）
12:00	集落内	ヒアリング調査３（年中行事調査）
9 月 8 日（火）	8:00	粟島港発（新潟県庁での中間報告会へ）

②里山分野の調査結果
里山分野については、特に竹林の荒廃が課題となっている。かつて良質の竹材を産出していた歴史があり、どのように管理をしていけばよいか詳しい方（男性高齢者）もご健在である。ヒアリングの結果、管理のための年間作業スケジュール、作業内容、面積と人手のおおよその量、里山環境との関係について明らかになった。試行実践に向けて竹材やタ

ケノコの産出などに効果的な竹林保全活動を盛り込んだ取り組みを構想することとした。

③農業

島内の農業は小規模・多品種生産という特徴を持っている。その担い手は高齢女性がほとんどとなっている。

ヒアリングの結果、冬期間を除き、春から秋まで様々な作物の生産をおこなっていることがわかった。「ひとりむすめ」という島独特の品種の大豆などの生産もあり、中学校でのキャリア教育（島産のマメを活用したアイスクリームの開発と販売）でも活用されている実態がある。

課題として、農地環境が機械化に適していない（段々畑や小面積、いびつな農地形状）こともあり手仕事がほとんどであること、高齢化が進みほとんどが高齢女性によっておこなわれており人手不足の状況にあることがあげられる。

一方で高度に機械化されていないため簡易な道具での耕作方法であり、作業内容によっては島外者も参加できるものが数多くあることが分かった。また島の高齢女性（おばあちゃん）との作業はそのコミュニケーションも含めた楽しみの要素もあるといえる。

これら課題、利点、プログラム要素を踏まえて試行プログラムを構想することとした。

写真７：島内に散在する小規模な畑

写真８：島の農業は簡素な道具で耕作される

写真９：島の女性からてご編みの原理を学ぶ

④生活文化（工芸品･郷土料理）

「テゴ」という伝統的な民具がある。かご状の袋で、もともとは島内に自生するカツラという植物によって編まれたものである。磯での海産物の採集をはじめ、島内の暮らしでの様々な場面で活用される。丈夫で物を入れる際の使い勝手がよく、デザイン性にも優れている。

女性たちを中心に伝統民具である「テゴ」編みの会が行われており、会の中心女性からその製法や活用方法についてヒアリングをおこなうと共に、実演体験をおこなった。その結果テゴの製作過程そのものが島民とのコミュニケーションを含む一つの楽しみの要素を備えており、貴重な経験となることが分かった。

日本海側の離島にとって特に秋から冬にかけての期間は野外活動も制限される日が多いことから、雨天時等の代替プログラムとして構想することが可能であると考えられる。

⑤共同作業･年中行事

島内には、詳細に数えると 100 近い共同作業･年中行事が指摘できる。今ではおこなわれていないものもあるが、それでも数多くの共同的イベントが存在している状況である。これらの行事は、島の仕事や暮らし･文化と密接な関係があるものであり、元来必ずしも島外者の参加を想定していないものも多い。しかし島外者にとって島の特徴を活かした作業･行事の数々は興味関心を引くものであると言える。また、島民にとっても作業や行事を存続するための人手の確保という点でもメリットがあると考えられる。

本追加調査では、自治会長を中心に協力を頂いて関係住民にヒアリングを行い、島外者と共に取組める作業や行事について抽出をおこなった。その結果、共同作業、年中行事それぞれにおいて５プログラム程度の設定が検討可能であることが明らかとなった。

⑥島民への中間報告と意見交換

追加調査期間中に、粟島浦地方創生戦略にかかわる住民報告会が開催されたため、本研究チームのメンバーも参加し、研究実施状況について島民向けの中間報告をし、住民との意見交換をおこなった。

意見交換では、里山･農地を活用したプログラム構想に関連して、活用可能性があるフィールドの紹介や、漁業分野の既存の観光・学習プログラムと連携した事業展開の可能性について意見をいただいた。その他作成した地域情報マップをもとに島内の歴史･文化資源の状況についてもさらに詳しい情報を収集することが出来た。

４）現地調査と住民との検討ワークショップの結果

本調査・追加調査の結果、写真画像約 1000 枚、地域資源カード約 300 枚、地域資源を活用した学習プログラム 7 案、地域情報マップを作成した（本報告書末に参考資料として掲載）。

それらの資料とワークショップで収集した意見を集約し、里山･農業、生活文化、共同作業･年中行事に焦点を当て、これらの営みに協働（お手伝い）できる試行プログラム作成を検討することとした。

（２）試行プログラムの作成と検討

調査結果を踏まえた島づくりに資する試行実践プログラムを作成し、関係住民と共に試行実践に向けた検討と準備を行った。

１）現地調査のとりまめ・分析

現地調査の取りまとめと分析結果を踏まえて次の方針と内容により試行プログラムを作成し、実践に向けた準備をおこなうこととした。

・試行プログラム作成の方向性と構成要素

背景と方向性	①島内資源の保全再生のキーとなるフィールドとしての里山と農地 ②集落の伝統文化の担い手として、工芸品・郷土料理・菜園作りと島内女性の役割に着目 ③現在の観光シーズンは 7～8 月に集中、それ以外（特に 11～4 月）の期間のプログラムが必要 ④外部者が関われる島の営みの再生･元気作りにつながる活動構築 （これまでの外部者＝観光客＝お客さん、ではなく、共に協働して取り組むことができる新たな外部者を新規開拓）
テーマ案	「粟島の恵みを生み出すおばあちゃんとの出会いとお手伝い」 ①島のおばあちゃんの知恵・・・島の農業・郷土料理 ②島の里山と畑と海の恵みのつながり・・・生物多様性、鳥獣害軽減、ミネラル供給機能「島の里山と畑は、海を耕す」 ③島人とのコミュニケーションと共同で育む集落行事と伝統文化
意図と構成要素	・プログラムの意図 島内の里山･畑の維持管理は、山菜･農産物だけでなく、その独特の地質構造とあいまって、豊かな水を育み、海の恵みを作り出している。 新たな保全型エコツーリズムとして、恵みを楽しむだけでなく、恵みを作り出すための島の生業･暮らし･日常生活を、おばあちゃん（おじいちゃん）のお手伝いを通して、貢献し体感するプログラム。あわせて文化伝承と恵み体験をセットする。島内の現在のニーズを踏まえて観光シーズンオフ中の取組みが主として構想する。 ・構成要素 プログラム構成要素として①～③の組み合わせで構成 ①島のお手伝いプログラム 畑の手入れ、里山の手入れ、山菜取り、収穫、冬囲いの手伝いなど集落共同作業への参加とコミュニケーション ②伝承プログラム 郷土料理の作り方伝承、工芸品作り伝承、伝統行事の手伝い･参加 ③島の恵み体験 海の恵み体感（漁･わっぱ煮など既存の観光資源やプログラムの活用）

２）試行プログラム案の作成

試行プログラム実施方針と、実施期間が 11 月中旬になるという季節的制約を加味し、実施可能な試行プログラム案を作成した。

プログラムは以下の 3 つの要素と内容で構成される。

プログラム１ 畑お手伝い（豆･大根など）	・各畑へ集合･説明・準備 ・お手伝い （豆収穫、大根収穫、大根の冷蔵庫作業、運搬作業） ・後片付け
プログラム２ 郷土料理会（大根料理、煮物等）	・さっこい交流館へ集合･説明 ・調理・会食・後片付け
プログラム３ 山（竹）仕事お手伝い、 テゴ編み体験	・山仕事：枯れ竹整理→青竹伐採→箸作り･お椀作り ・テゴ編みその他 （資料館にて、道具の説明込みでの体験学習回の実施）

３）試行プログラム案の住民との検討（※大正大学独自研究費にて実施）

試行プログラム案を住民と検討し準備をおこなうため、10 月 29～31 日の日程で担当教員１名が訪島し調整をおこなった。

試行実践をおこなうことで、準備の負担量、持続性の検討、運営体制の検討、プログラムが実質的にお手伝いとして機能するかあるいは体験的な要素が強いものとなるかの確認をすることが必要などの意見が出された。

以上を踏まえて試行実践として 1 泊 2 日の次のプログラムイベントを設定した。

■場所	島内の畑や里山（郷土料理教室はさっこい交流館）
■日程 ・11 月 14 日（土） 13:30 14:00 16:30 ・11 月 15 日（日） 9:00 9:15	 役場集合・移動 プログラム１　おばあちゃんの畑お手伝い（内浦・釜谷地区） ・豆・大根収穫・運搬など プログラム２　郷土料理講習会（さっこい交流館） ・大根料理・煮物他、季節の島料理 資料館前集合 プログラム３　島伝統の竹林整備講習会（宮口） ・草・細木刈・枯竹整理・竹伐採・運搬集積 ・てご編み講習会（資料館２階） （てご編みによる小物類づくり）
■持ち物など	畑仕事・山仕事に適した服装（帽子・軍手・長靴・フードつきパーカーなど）

（３）試行プログラムの実践と修正

試行プログラムを実践し、有効性と課題について検証した。

１）試行プログラム実践の概要

試行プログラム実施に当たっては、本報告書末（①資料２）に掲載したチラシを作成し、広報と募集をおこなった。学生５名、教員１名（以上本事業経費）の他、首都圏より一般３名（子ども２名含む)、島内参加者 10 名程度の計 20 名程度の規模で実施した。

当日はあいにく雨天となったため次のように内容を変更した。里山分野：竹林の管理作業を予定していたが雨天のため中止。農業分野：畑での作業を予定していたが内容を変更し、屋内におけるマメ選別作業をお手伝い。生活文化：テゴ編み、郷土料理教室を予定通り実施。また晴れ間を見てアジ釣り体験を行った。

２）試行プログラム実施結果

以下に、参加者からの体験記を掲載し、試行実践内容の結果と検討内容を振り返りたい。

①農業分野：マメの選別作業

・外部者参加の可能性と「一人娘」の現状

粟島には主力商品の１つである「一人娘」という大豆があります。この大豆栽培を理解すると同時に、外部者が作業に参加可能であるかを確認するために、私たちは豆の選別のお手伝いをさせていただきました。この豆は、現地のおばあちゃんたちが味噌を作るために使用されているものです。さらに最近では、島内の中学生のキャリア教育の一環として、この大豆を利用した新たな産品の開発を行っています。おばあちゃんに教わりながら、現地の子どもたちと一緒に作業をしました。

・作業の進め方―地元の子どもたちも初体験の豆の選別―

写真 10：おばあちゃん（左）を囲んで豆の選別作業

はじめに、おばあちゃんが実際に選別をしている様子を全員で見ました。選別をしながら使える豆と使えない豆の特徴を教えていただきました。現地の子どもたちですら、この作業をすることは初めてだったようで、みんなで話し合いをしながら作業を進めていきました。豆の量も非常に多く、直径 30 ㎝ほどのざるに約 3 つ分ありました。基本的に傷がついてしまっている豆は使えないものなのですが、小さい傷であれば使えるとのことだったので、そこの線引きが非常に難しかったです。選別が終わり、おばあちゃんに確認してもらってもその中からまだまだ使える豆が出てきて、1 度や 2 度やっただけでは完璧にできない作業であることを実感しました。作業をしている最中は、子どもたちやおば

あちゃんと話をしながら、また自分で判断できない豆は判断してもらいながら作業を進めていきました。

・お手伝いのためには事前学習が重要

今回は、収穫した豆の中でもごく一部を選別しましたが、実際はもっと多くの豆が収穫されています。体験させていただいた量だけでも多いなと感じたが、これよりももっと多くの豆を各家庭のおばあちゃん、おじいちゃんが一人で作業をしているということを知ることができました。これはおばあちゃんたちの時間をそうとう奪ってしまっているのではないだろうかと考えました。反省点としては、まったく知識のない状態で手伝うことになってしまった点です。晴天であれば、畑仕事の体験をした後に豆の選別のお手伝いをする予定でした。畑仕事の大変さも知る事ができれば、さらに良かったのではないかと思います。また、コミュニケーションをとる点でもあまりスムーズにいきませんでした。これは全体的な反省というよりは個人的な反省になってしまいますが、大学生活の中でコミュニケーション能力を身につけておくことは、実際に現場に出た際に非常に重要になってくると感じました。

・プログラム化に向けた課題－天候・能力・ニーズとのマッチング―

今後プロジェクトとして展開していくと考えると、作業としては小学生から 30 代前半くらいまで幅広い年代の人が参加できるものであると考えられます。豆の選別のお手伝いだけをするのではなく、畑仕事から参加することによって、普段都会では体験することのできない作業をすることができ、さらに豆の選別という粟島ならではの作業も行うことができます。しかし、この作業は天候に大きく左右されてしまいます。天候に恵まれなければ行うことができないため、その点について考慮する必要があると感じました。

②生活文化分野：テゴ編み

・テゴ編みについて

粟島で昔から使っている物を入れるための道具です。各家庭にテゴを作る道具があり、手作りしていました。海で取った海藻を入れるのに使ったり、畑の収穫物を入れたり・・・。

今回の「てごあみ会」では、日常でバッグとして使用できるように工夫されたお洒落なものが沢山出来上がりました。テゴ網作りではまず、テゴの前半部分の作成手順を教わりました。その後各自で、教わったところまでテゴの作成を進め、前半部分が終了した人から、後半部分の作成方法を指導してもらい、後半部分を作成し完成させます。

写真 11：てご編みの出来栄えを確認する

・地元の人とのコミュニケーション～手作業で生み出されるコミュニケーション

自分たちにとっては慣れない作業を行うため、作業手順を覚えることが出来す苦労しました。何度もお母さんたちに聞きながら作業を進めていきましたが、なかなかはかどりませんでした。慣れない作業に加えて、手先が器用ではない男二人が作業をしていたため、何度も同じところでつまずき、少し進めてはやり直しを何度も繰り返す形となりました。そんな自分たちを見かねて、おばあさんたちは何度も声をかけてくれました。自分たちも分からないことや、気になったことは積極的に聞きました。こちらから質問することで、作業手順以外の話を聞くことができました。都会の人とは違い、こちらから話しかけると嫌な顔を全くせずに話を聞いてくださいました。質問をしたり、声をかけることをためらうことなく、積極的に話しかけることがコミュニケーションをとる上で大変重要だと思いました。

・苦労・感動・反省・学んだこと～伝統工芸の伝承と継承～

写真 12：てご編みの仲間たちと楽しく作業を

テゴ編みでは、まず作業手順を覚えることに苦労しました。先述したように慣れない作業をするため、なかなかはかどりませんでした。その一方で、コミュニケーションをとることはそんなに苦労しませんでした。こちらから話しかけると快く対応してくだり優しい方たちだと感動しました。さらに、作業体験を行っているため、話題がないと困ることはありません。加えて、作業に集中し、真剣に取り組んでいれば、おばあさんたちの方から話かけてくれました。作業に集中することで、分からない所や、質問したいことも出てきます。まず、作業に集中する、そうすることでコミュニケーションも円滑に行えることができると学ぶことができました。

教えてくれたお母さん方のほとんどが、自分たちもできる人に教わりながらやっていると話していました。ボケ予防になるし、少し空いた時間にやることができるのがいいそうです。

こうした話をお聞きして、なんでもそうだが、物は必要とされないと衰退していくのだと感じました。しかし、環境に良い素材で作ることができる伝統工芸が廃れていってしまうのはもったいないと思いました。

・活動の意義を振り返って

テゴ編みのへの参加活動の意義として、作り手の少なくなった伝統工芸品の継承支援や島の女性たちのコミュニケーションを促進させる役割といったものがあげられると思います。確かにテゴ編みは、体験としては非常に面白みがあり、島の伝統工芸の歴史などを学ぶ上では大変有意義な活動であると感じました。しかし、お手伝いプログラムの観点から

考えると、足を引っ張っているところもあり、必ずしもお手伝いと言えないと考えられます。プログラムの中での位置づけを再検討する必要があると感じました。

③生活文化分野：遊び・釣り

・アジ釣りから学ぶ現地での生活

郷土料理との結びつきを学び、島での遊びや日々の生活への理解を深めるために、豆の選別を一緒にお手伝いしてくれた子どもたちやそのお父さん方とアジ釣りの体験をしました。観光船乗り場としても活用されている堤防で釣りを行いました。使用した物は、普通の釣り竿と餌として小さなエビです。こちらは普段から子どもたちも行っている事だったようで、今度は子どもたちが先生となって私たちに教えてくれました。

写真 13：地元の子どもたちとアジ釣り。30 尾以上もの釣果があり、島の海の豊かさを実感した

・釣りの方法―基本的なやり方と子どもたちの工夫―

1つの竿に4から5つほど釣り針が付いていて、そこに小エビを一つ一つ付けていきます。驚いたことは釣り糸を垂らすだけで、すぐに釣れてしまうことでした。私は、釣りは全く経験がなく、初心者だったので不安でいっぱいでした。しかしすぐ釣ることができたので、みんなと同じように楽しむことができました。エサの取り付け方や釣り糸を垂らした後の動かし方などを子どもたちに教わりながら時間も忘れるほど没頭してしまいました。現地の方の釣りの工夫としては、針にエサを付けるのではなく、直接海に撒いていました。このような方法をとってもアジが釣れたので改めて自然豊かな土地であることを認識することができました。

・学んだこと―小さな魅力でも見逃さないことの大切さ―

アジ釣りは季節ごとの作業というよりは、子どもたちの遊びの延長であるような印象を受けました。現地の人々にとっては普段からしている遊びであっても、東京に住んでいる我々にとっては非常に魅力的な体験であると感じました。このように、ちょっとしたことでも島外の人々にアピールするための魅力となることが改めてわかりました。小さなことでもその土地の魅力であるため、見逃さないことがプロジェクト成功への鍵になるのではないでしょうか。

・今後の展開について―釣り体験のメリットと今後やってみたいこと・考えること―

先ほども述べたように、アジ釣りは釣り初心者の私でも簡単に手軽に楽しめるものでした。また、現地の子どもたちとすぐ打ち解けることもできたため、都会と島の交流という点では非常に効果的なものではないかと感じることができました。今回は海釣りのみでしたが、川釣りなども計画し体験することができればさらに良いものとなるでしょう。ただ

こちらも、畑仕事の体験と同様に雨が降ってしまうと難しいため、雨天時の対策を考えなければなりません。

④生活文化分野：郷土料理教室

・料理教室の意義

　地域資源を利用した食文化の魅力・島の生活文化を学ぶことを掲げて、島の日常食としての郷土料理を地元のお母さん･お父さん方、子ども達と共につくり、会食をおこないました。

写真 14：島の女性たちから郷土料理を学ぶ

・メニューについて

【アジフライ】

アジ(鯵)をひらき状態または 3 枚におろして溶き卵に漬け、パン粉をまぶして油で揚げて作る揚げ物料理です。

写真 15：アジフライ

【アジのナメロウ】

　新鮮なアジだからこそ出来る料理。地元のお父さんに見事な庖丁捌きを見せてもらいました。

写真 16：アジのナメロウ

【イモダコ】 タコとジャガイモを、砂糖、醤油、酒、水で甘じょっぱく煮ればいいらしい。

写真 17：イモダコ

【漬物（大根）】

地元の大根で地元の人がつけた漬物

写真 18：大根の漬物

【タコの刺身】

調理のコツは、庖丁で切れ目をたくさん入れること。醤油のアジがしみこみやすくなると共に食感もよくなる。

写真 19：タコの刺身

【サツマイモの天ぷら】
粟島のイモ類は土質のせいか、イモ類が大変おいしく育つ。ほくほくしたサツマイモをからりと揚げました。

写真 20：サツマイモの天ぷら

【汁もの】
　この時期に取れる島の野菜などを入れて魚料理に合う汁物を作りました。

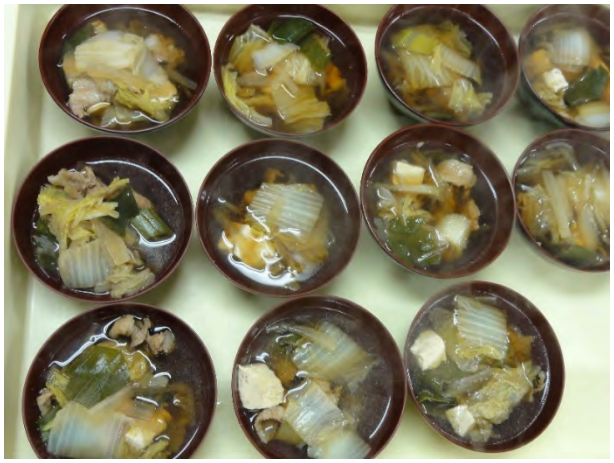


写真 21：汁物

・魚さばきを直に教わる－料理から生まれるコミュニケーション－
　魚をさばくのは男子学生３人と島の子供たちが担当しました。男子大学生３人のうち２人が魚をさばいたことがなく、島の方にさばき方から教わりました。
　話す内容がないという状況はなく、料理中のほとんどの時間をさばき方や料理の仕方を教わっていました。そのため、コミュニケーションの取り方で困ることはありませんでした。魚をさばくことに慣れてきたら、島の伝統料理の話を聞いたりすることができました。一つの作業を何人かで共有することで、親近感がわき、会話も弾みました。魚をさばいたことがない人がさばくと、どうしても歪な形になったり、失敗したりします。失敗するこ

とで、やり方を教えたり、笑ったりしながら進めることを行いやすくなりました。下手な人と一緒に作業をするとより盛り上がり、話が弾むことが分かりました。

・感動ー島の教育力ー

普段からやっているからだというが、島の子どもたちが魚やタコをさばくことに何ら抵抗なくさばいていたことに感心しました。生の食材に触れ、自分で採ってきたものを自分で調理することで命の大切さを知ることはもちろんですが、料理のすることの大変さも知ることができます。大変さを理解することで、感謝の気持ちも強くなるのではないでしょうか。もう一つ子どもたちを見て感心したことがあります。自分の皿にのった食べ物を残す子が一人もいなかったことです。野菜も魚もすべてきれいに食べきっていました。自然と近い環境が食育に与える影響力を感じました。

写真 22：タコの下ごしらえの仕方を学ぶ

写真 23：地元の子どもたちも慣れた手つきで料理のお手伝い

・プログラム体系化の必要性

料理教室ということで、カリキュラムほどしっかりしたものでは無いにせよ、指導手順や指導者の役割分担などはあった方がよいと思いました。ただしっかりした枠組みを作り、それに当てはめていくことは、プログラムの性質上、島の雰囲気や風土になじまない気がします。しかし、ある程度体系化させ進行していかなければ、この体験を行う意味や、こちらが伝えたい思いも伝わらないという現象が起こりうるのではないかと思いました。

３）モデルプログラム作成に向けた修正・課題点の抽出

試行プログラムの実践の結果、モデルプログラムの作成に向けて、次のような修正･課題の検討が必要であることが明らかとなった。

①雨天時の対応策について

本プログラムが想定している 10 月～6 月までの期間中は、この地域において特に天候が悪い日が多い。そのため、雨天時の代替プログラムをいかに確保するかが重要であると言える。今回の試行プログラムでは、荒天のため特に里山･農業分野の活動を縮小せざるを得なかった。プログラム全体のバランスを考えながら雨天時でも実施可能なメニューの検討

が必要である。
②お手伝いと参加・体験の区分を－島外者のかかわり方―
本プログラムは、島民と島外者による協働の島作りを志向する中で、おばあちゃん･おじいちゃんのお手伝いを通じて、島づくりに寄与していこうという意図がある。しかし実際に試行プログラムを実施した結果、お手伝いというよりは、体験･参加といった観光的要素が強い活動メニューもあることが分かった。例えばマメの選別作業はお手伝いとしての要素が強い一方で、アジ釣りやテゴ編みなどの活動は参加･体験などの要素が大きい。
今回は悪天候のため里山や野外での農作業が出来なかったため明らかになっていないところもあるが、プログラムの活動実態に合わせてお手伝いと参加・体験との類型区別の明確化が必要であると考えられる。
③役割･機能の明確化－島民指導者のかかわり方―
島の暮らし･仕事など、本来島外者の参加を想定していない活動を基盤とした本プログラムは、島民にとっては当たり前の日常生活に属するものである。したがってどのように外部者に対して取り組みを解説したり注意点を説明したりするか意識化し検討する必要があると考えられる。例えば、今回のプログラムでは郷土料理等で調理過程において効果的なガイダンスがあるとより一層理解が進んだのではないかとの感想があったが、そういったガイダンスを可能とする島民のためのマニュアルの整備も必要ではないかと考えられる。
外部者と共に効果的に活動を実践していくための島民指導者向けの手引書の作成を検討する必要があると考えられる。
④準備の簡易化、生活時間に合わせた実施方策
島の日常の暮らしと生業へのお手伝いを掲げた本プログラムであるが、外部者を受け入れるためにかえって負担が増えるのではないかとの危惧も聞かれる。試行プログラムにおいても、島の生活時間に配慮したプログラム実施時間の検討や活動フィールドでの準備の簡素化、あるいはお手伝いに適した活動メニューの精選といった課題が浮き彫りになった。
今後も、島の日常生活の実態にさらに寄り添うことで、準備を簡素化したり生活時間に合わせた実施方策を検討する必要がある。このことは将来的に本プログラムを島民主体の自主的運営で取組むことを見据える上でも重要な検討事項であると考えられる。

（４）首都圏におけるプレゼンテーション・プロモーション活動

試行プログラムの実施と前後して、豊島区公共施設、大正大学イベント、離島物産展等において、本調査・研究成果をプレゼンテーションするとともに、粟島の産品やサービスおよび構想中のプログラムのプロモーションにつなげるための PR 活動を行った。
１）豊島区公共施設におけるプレゼンテーション
豊島区生涯学習施設「みらい館大明」の１０周年記念文化祭において、展示･プレゼンテーションをおこなった。住民からは都市部とは異なる粟島の自然や生活文化の暮らしや日常的営みについて素朴な関心が寄せられた。またプログラムで具体的にどのような体験が

出来るのか、その体験が島の保全や生業にどのようなかかわりがあるのか興味をもたれた来場者もいた。

海の美しさや豊かさをぜひ体験したいという来場者が多く、プログラムの設定に当たってはこうした海分野の取り組みとの連携をどう構築するかが鍵であると改めて考えられた。

写真 24：みらい館大明での展示発表

２）大正大学イベントにおけるプレゼンテーション

大正大学大学祭「鴨台祭」において展示･プレゼンテーションをおこなった。来場者からは粟島への地域的関心だけでなく、本研究が島づくりに具体的にどのような効果を持っているのか、また構築したプログラムをどのように運営していくのか、都市部とどのようなかかわりをもたせることが出来るかなど、研究･調査の意義と内容に関する情報交換･意見交換がおこなわれる場面が見られた。

写真 25：大正大学鴨台祭での展示に見入る来場者

島づくりに関係する本研究･調査の立位置を常に意識していくことは、プログラムの運営主体をどのように位置づけ、育てていくかということにも関係することであり、その意味でも貴重な意見交換が出来たと受け止めている。

３）離島物産展における PR

池袋で開催された離島物産展「アイランダー2016」において、調査チームの学生を派遣し、粟島物産やツーリズムの PR･販売促進のお手伝いをした。また、本研究調査で作成したモデルプログラムの PR をおこなった。粟島をテーマにするツーリズム人気投票「あわしま満喫ツアー人気投票」がおこなわれ、本研究で作成したモデルプログラム「粟島の恵みを生み出すお手伝いツアー」は第 3 位となった。

写真 24:アイランダーでは学生が PR 活動を手伝った。

人気投票アンケートでは次のような意見があった。（）内は人数。

・島ならではの企画（2）
・島民との交流がよい（1）
・園芸はリハビリによい（1）
・生の魅力に触れ文化が豊かになる（1）
・大人も子どもも楽しめる（1）
・このツアーにマグロ捌きや漁協のお仕事見学を組み込みたい（1）
・料理と祭りが良い（1）

以上、首都圏でのプレゼンテーション活動を通じて得られた都市住民側の意見や反響等を集約し、モデルプログラムをさらに検討し反映させ完成させていくこととした。

（５）モデルプログラム作成と実施体制づくりの検討

現地調査、住民とのワークショップ、試行プログラムの実践、首都圏でのプレゼンテーション活動等、一連の取り組みによって得られた情報を基にモデルプログラムを作成し、その実施体制と事業化に向けたプロセスについて検討を行った。

１）モデルプログラムの作成

島民･島外者協働の「お手伝い」を中心的なコンセプトとして、次のテーマ･構成内容による年間運営のモデルプログラムを作成した。以下、作成チラシより抜粋し掲載する。

①テーマ

「粟島の恵みを生み出すお手伝いツアーー粟島の魅力は「夏」だけじゃない。島のおばあちゃん･おじいちゃんたちと共に「秋」･「冬」･「春」の魅力も体験しませんか？ー」

図４：お手伝いプログラムの PR チラシ

②プログラム趣旨

美しい海に囲まれた粟島。この海は、里山や畑でろ過されたミネラル豊かな島の沢水によって育まれています。まさに粟島のおじいちゃん、おばあちゃんたちは、長年にわたって里山の手入れを行い、畑を耕すことで、この美しい海を耕してきたといえます。

このツアーは、島の人たちとともに里山、畑、共同作業、各種手仕事など島伝統の暮ら

しのお手伝いを通じて、人と自然を元気にしていくプログラムです。
③プログラム構成内容
・畑
　粟島の畑作業は素朴な道具を用いてきめ細かに行う伝統農法です。おばあちゃんとともに海が見えるしおかぜの気持ちいい段々畑で、伝承野菜の栽培など季節ごとの農作業を楽しみます
・里山
　粟島の里山は山菜の宝庫。春は数多くの山菜採りが楽しめます。秋は島の伝統産業だった真竹（マダケ）の手入れ。伝統的方法によって竹林を整備し豊かな里山を再生させます。
・伝統行事
島には 100 近い年中行事が存在しています。その中から島外の方も一緒に取組める年中行事を 5 つ厳選。お手伝いプログラムと共に島の人との交流を深めます。
・共同作業
　島の人たちは力を合わせて生業の道を守ってきました。海苔採りのための磯道普請などのお手伝いと交流を通じて、粟島を生きる暮らしの文化に触れます。
・郷土料理と手仕事
　畑や里山の恵みを料理に。島のおばあちゃんたちの手料理を一緒に学び試食をします。また、カツラなどの島の植物を使った島伝統のかご「テゴ編み」なども体験します。
・島外者もお手伝いできる行事
　乗り初め漁神楽（1 月 11 日）漁師の祭り
　七夕（8 月 6 日）舟を流す
　盆踊り（8 月 13･14 日）事前練習参加者は、太鼓・うたいも可能
　釜谷六所神社祭礼（10 月 8 日）竹灯籠作り
　八所神社祭礼（10 月 26･27 日）灯篭やのぼりを立てたり、神輿を担ぐ
④モデルスケジュール等
・1 日目
昼　：粟島港到着　昼食とレクチャー
午後：（プログラム 1）里山、畑、共同作業から季節に応じて選択※雨天時はテゴ編み作り
夕　：（プログラム２）郷土料理教室・会食
・2 日目
午前：（プログラム３）里山、畑、共同作業から季節に応じて選択※雨天時はテゴ編み作り
　　乙姫の湯（温泉）入浴
昼　：昼食・出発準備
午後：粟島港出港
・持ち物･服装等　野外活動に適した服装（長袖長ズボン）、エプロン（郷土料理教室）帽子、タオル、入浴道具等

あわしま

おじいちゃん・おばあちゃんとの出会いと島のお手伝い

粟島とは

粟島浦村は人口350人余り、日本海に浮かぶ周囲20kmほどの離島の村です。本土側からは新潟県最北端の市である村上市より汽船で1時間半ほどの位置にあり、穏やかな海岸資源、そして力強く野生馬を育んだ里山の恵みが魅力です。西海岸は日本海の荒波に洗われた岩礁地帯となっており、まさに絶景と呼ばにふさわしい風光明媚な景観が広がっています。

お手伝いプログラムの概要

粟島の美しい海は、里山や畑でも過ごされたミネラル豊かな島の沢水によって育まれています。まさに粟島のおじいちゃん、おばあちゃんたちは、長年にわたって里山の手入れを行い畑を耕すことで、この美しい海を耕してきたといえます。

このツアーは、島外からの来訪者と島の人たちがともに、里山、畑、共同作業、各種手仕事・伝統行事への参加など島伝統の暮らしのお手伝いに取組むことを通じて、人と自然を元気にしていくプログラムです。

モデルスケジュール例

<1日目>

昼	粟島港到着 昼食とレクチャー
午後	プログラム1 里山、畑、共同作業から季節に応じて選択 ※雨天時はテゴ編み作り
夕	プログラム2 郷土料理教室・会食

<2日目>

午前	プログラム3 里山、畑、共同作業から季節に応じて選択 ※雨天時はテゴ編み作り 乙浦の湯(温泉)入浴
昼	昼食・出発準備
午後	粟島港出港

持ち物・服装等
野外活動に適した服装(長袖長ズボン)、エプロン(郷土料理教室)
帽子・手ぬぐい・入浴道具等

東京から岩船港まで

電車

東京 JR新幹線 新潟 JR線 村上 岩船港

村上駅から岩船港まで

バス
村上駅 約20分290円
岩船上大町 徒歩10分 岩船港

乗り合いタクシー※要予約
15分 中学生以上700円
小学生350円(未就学児無料)
乗車30分前までに予約
予約先:粟島汽船株式会社 (tel0254-55-2131)

フェリー
普通船「フェリー粟島」 新高速船「awaline きらら」
※高速船は要予約
予約・問い合わせ
観光案内所 tel0254-55-2146 受付8:30-17:00
当日の問い合わせ先
粟島汽船
岩船 tel0254-56-7792 受付7:30-17:00

本プログラムに関するご相談は、離島と都市を結ぶ地域づくり学習研究会(大正大学地域構想研究所・出川まで。
tel 03-5394-3048
fax 03-5394-3055
mail s_degawa@mail.tais.ac.jp

図５：モデルプログラムの紹介パンフレット

２）実施体制と事業化へ向けた検討

①実施体制－島民と島外者が協働する仕組みづくりの構築－

モデルプログラムの実施のためには、受け入れ先である島民側の組織体制整備が必要である。島の恒常的な人手不足の事情を考慮に入れると既存組織を活かしながら、住民の日常生活の中で自然と取組める方策が求められる。本検討では、プログラムを団体受け入れのものと個人受け入れのものの 2 つに区分し、組織的に対応するものと民宿等で個別に対応するものとに分類し対応する案など検討がされた。今後、行政、自治会、観光協会、各種島民団体などの関連団体との効果的な情報交換と実施に向けた連携体制の構築が求められる。

また、本プログラムは事前の学習･情報提供が重要であるという性質をもっているため都市部側での PR・プロモーション及び事前学習活動等を提供できる組織団体の育成が不可欠であると考えられる。粟島が今後プログラムを運営するにあたって都市部からの支援体制を検討した結果、本研究にかかわった学生･教員を中心に「離島と都市を結ぶ地域づくり学習研究会」を結成した。また、起業志向を持つ学生を中心に本取り組みを支えることに関連した事業型 NPO 及びベンチャービジネスの立ち上げ準備をしている状況である。

②事業化に向けたプロセス－取り上げる季節･分野ごとの試行実践の必要性

試行プログラムでは 11 月中旬の時期にわずかな活動しか行えなかったため、事業化に向けた実施データが不足している状況である。他の季節や分野ごとの試行実践が必要不可欠であり、十分な試行結果を踏まえて総合的にモデルプログラムの事業化に向けたプロセスを検討していく必要があると考えられる。

５．研究調査成果と次年度以降の展望

（１）本研究調査の成果

本研究調査活動の結果により、漁業や観光等を中心とする従来の地域づくりの視点に加えて、次の新たな視点を盛り込むことができたことが大きな成果といえる。

１）里山･農業・生活文化への着眼

これまで、粟島浦村において、特に島外者の受け入れを前提とした地域振興方策は、観光分野や漁業分野（海資源の活用）といった分野を主とするものであった。

本研究では、島民と島外者が協働し共に取組める島づくり活動を創出するという視点から調査を行うことで、これまであまり着目されてこなかった島の里山や農業、生活文化分野での協働活動創出の可能性を提示することができた。

これらの分野は観光・漁業などの島の主力産業を支える重要な下部構造でもある。例えば、観光・漁業の貴重な資源である島周辺海域の環境は、島内の里山・農地の健全な保全と密接な関係がある。そして里山・農地環境は島民の日常的な生活文化の営みによって保全・維持されているものである。しかし近年の急速な人口減によりこれらの営みを継続していくことが困難な状況である。

以上を踏まえて、里山・農業・生活文化をテーマとして、島外者参加による協働活動を促進し、その維持・保全・継承と地域活性化につなげるための具体的なプログラムを提示することができた。

２）高齢者を軸とした営みに光を当てる

里山・農業・生活文化は、現在島の高齢者によって主として担われている。本研究により、島外者との協働という側面からあらためて島の高齢者の暮らしと営みに光を当てることができた。「島のお手伝い」をテーマに掲げて、高齢者と協働することで島の恒常的な課題となっている人手不足を補完するとともに、伝統的な知恵と技術を継承し再生・活性化へ導くための道筋を提示することができた。

３）観光の枠を超えた都市部住民の参加協働・連携方策の検討

従来、粟島浦村では島外者は「観光客」としての位置付けがほとんどであった。本研究により、観光という枠組みを超えた新たな島づくりの参加協働の形態を構想することができた。また、首都圏での複数にわたるプレゼンテーション・プロモーション活動を通じて、都市側のニーズとのマッチングについても検討できたことも大きな成果であると考えられる。さらに本調査参加学生を中心にして「離島と都市を結ぶ地域づくり学習研究会」を立ち上げるなどの新たな動きも展開している。

４）人材育成･担い手育成につながる新たな事業展開の可能性

モデルプログラムとして「島のお手伝い」を掲げることで、島内外の新たな人材・担い手育成の方向性を提示することができた。島の自然・文化・伝統を踏まえながら、その維持・保全・継承、さらに新たな交流ビジネス事業（島の教育・学習機能を活かしたツーリズム等）の可能性を示唆することができた。これらは島の日常の暮らしの強みを活用するものであり、島外者にとって将来的な移住・定住のインセンティブにつなげることが期待できるものでもある。

（２）課題と次年度以降の展望

１）モデルプログラムの試行実践

本年度の取組では、試行プログラムが 11 月中旬に３プログラムを実践するにとどまっている。また、あいにく雨天のため十分な試行を行うことができなかった。プログラムをより確度高めるためにも季節ごと分野ごとのさらなる試行実践の積み上げとデータの蓄積が必要であると考えられる。十分な試行結果と蓄積データに基づくことで島民と島外者が協働し実践できる効果的な活動の事業化が検討できると考えられる。次年度以降の課題としたい。

２）ネットワーク型の運営体制づくりと事業化に向けたプロセスの構築

モデルプログラムを具体的に実践に移していくためには、島内・島外の双方にコーディネートできる仕組みが求められる。しかし現状の島内の限られた人材・組織資源では新たな組織体の設立は極めて困難であると考えられる。行政関連団体、自治会関連団体、観光

協会など既存の関連団体を活かしたネットワーク型の運営体制をいかに組めるか、検討課題である。

また地域独自性を活かした本モデルプログラムの性格上、都市部での十分な周知・説明が不可欠であると考えられる。そのための都市部側の運営団体・組織体の構築が求められる。本年度、当事業の参加学生を中心に「離島と都市を結ぶ地域づくり学習研究会」が取り組みを開始しているが、今後活動の充実が求められる。

次年度以降、島内・島外の関連団体のネットワーク化と実質的な運営体制を構築しながら、事業化に向けたプロセスを検討していくことが課題である。

６．総括

本年度の研究調査事業では、「粟島しおかぜ地域共生プログラムの構築研究－島資源を活かした学習・ツーリズム・産品開発と首都圏連携による雇用・定住促進策の検討－」をテーマに掲げて、次の取組を行った。①現地調査と住民とのワークショップの実施、②試行プログラムの作成と実践、③試行プログラムの修正とモデルプログラムの作成、④首都圏におけるプレゼンテーションとプロモーション活動、⑤体制整備・事業化の検討。

本研究調査では、島民と島外者がともに協働し島づくりに寄与するための取組として、里山・農業・生活文化に光を当て、高齢者を軸に「島のお手伝い」という具体的なキーワードを引き出しプログラム化できた。今後は、観光・漁業分野等既存の島の活動との効果的な連携の仕組みづくりを見据えながら、本研究で作成したコンテンツを具体的に実践にしていくためのさらなる試行の積み重ねと事業化に向けたプロセス構築が求められる。

今後とも粟島の貴重な自然・文化・伝統、そして人と人をつなぐための挑戦を続けていきたい。それは次世代に向けて、地方地域の価値を再発見・再創出する営みであるとともに、都市部地域側の課題や暮らしの見直しとも響きあうものだからである。